琵琶機関紙

京絃

第三四三号　京絃社

年頭の辞

主幹　植村　冥水

明けましてお目出とうございます。旧年中は色々と御指導御鞭撻を頂き有難うございます。どうぞ本年もよろしくお願い申し上げ、併せて愛読者の皆さまに幸福がもたらされますよう祈って止みません。

琵琶楽の振興発展に対処するには如何にすべきか、これは昭和初期以来、長年にわたる重大な課題でありますが、云うに易くて仲々思うように参りません。筆者は折りに触れ愚見を開陳して来ましたが、年頭に当り先ず申し上げたいことは、一般公開の場では、明治以降の戦争ものの演奏を遠慮してはどうか。歴史というものを軽視する今の若者たちに、琵琶楽に興味を抱かせるような現代向きの琵琶歌詞を作って公開演奏すると共に、明治、大正、昭和の戦争もの、たとえば両中尉、九連城、橘大隊長、広瀬中佐等の戦争を崇拝するが如きものは演奏会の席では遠慮して、現代向きの柔らかい内容の歌詞を新作、時には艶物（つやもの）などをも聴かせて、琵琶は決して堅苦しいものばかりではないということを、男女青壮年層の人たちに印象づけて、琵琶の道に志ざせるように努力するのも一つの方策ではなかろうかと思います。

薩摩琵琶は、昔、鹿児島の島津日新公が武士道鼓吹のため、勇壮活発な琵琶歌を奨励されたと聞きますが、今は時代も変り、特に終戦後は世相が一変して、戦争放棄、経済大国の日本となり、歌謡界も昔の姿は影をひそめて、最近はカラオケブームの一辺倒となりました。邦楽界の冠たる琵琶楽もこの辺で心を新たにして、若者にも愛されるような方向に進み、次代を背負う一般青壮年者に期待する方策を執っては如何でしょうか。

明治、大正生まれの人の多い現在の斯界は、まず青、壮年層の琵琶人を育成することが何よりも急務だと存じます。

些か愚言を弄して年頭の辞と致します。

四絃漫筆（一七）

島津天嶺

琵琶歌雑考（三）

前回御紹介した萩原竜洋先生編著の「注解薩摩琵琶歌集」（以下本稿では萩原本と呼ぶ）の中で、注解の労をとられた千田幸夫先生は、「薩摩琵琶においては、本来詞章曲節をも口伝によって伝えられるのみであり、従ってテキストというものを持たないのを原則とする。巷間見うけられる琵琶歌本の大方は、各流弾奏家の私家版の類であって、収載曲目もそれぞれに限られ、それぞれに少なからぬ異間や意義不通の箇所を存するが、それも誤植その他の印刷上の手違い以上に、各流派による口伝の差が反映していること、更には伝誦の上にはどうしても避け難い転訛をこうむった結果によるというべきであろう。」と述べられ、転訛前の元の言葉を発掘されておられる。ただこの本が萩原先生の吟誦のままにという趣旨で作られたために、その誤りを指摘されたにとどまり、訂正にまで至っていないことは少し惜しい気がする。

さて、琵琶歌のうちで、明治に入ってから興った錦心流や筑前、錦琵琶の歌は歌本も整

駿水▼山科の別れ｜杭東詠水▼戦艦大和｜小西甫水▼川中島｜中野淀水▼城山｜内田欽水▼楠正成｜尾山好水▼合奏掛合潯陽江｜大阪支部有志▼（以下来賓）新撰組｜京都木下皇水▼日蓮誕生｜神戸三浦蓮水▼小栗栖｜東京杉本淳水▼竜の口｜木村蓮水▼湖水乗切｜会主中山鳳水▼坂崎出羽守｜小川吟水。

ラヂオ、テレビで琵琶放送

○：十二月九日(木)午後三時五分NHK・FM。時雨曽我｜藤波桜華女史放送。

○：十二月十四日(火)午前七時半朝日テレビ。義士討入｜石橋旭嶺、作花旭友、田中歉水三氏で放映。

訃報

甲田勧水氏　七月十五日老衰のため逝去、享年八十五才。錦心流一水会系の古老として永年に亘り琵琶楽の振興発展につくした功労者。

大井錦淀氏　九月二十日心臓発作のため逝去、享年七十七才。山口錦堂門下の逸材で大正十四年錦心流琵琶に志し爾来埼玉県下で活躍された温厚な紳士で、竜の口、茨木等が得意であった。

古家絃風氏　九月二十二日老衰のため逝去、享年八十一才。故薩摩絃風氏の秘蔵弟子で正絃会の重鎮であった。

花俣圭水氏　十一月二十七日病気（病名不詳）のため逝去、享年八十四才。大正四年新谷桂水氏に入門、昭和五年総伝。一水会本部副部長として敏腕をふるい錦心流の発展に寄与された功績は大きい。右謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

予告

○：**京都琵琶協会一月例会**　一月九日(日)午後二時本部平井会長宅。

○：**京都行願寺観音祭に琵琶献奏**　一月十七日(月)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。

○：**新春琵琶名流演奏会**　一月二十二日(土)昼東京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会。

○：**京都琵琶協会新年宴会**　一月九日の例会後夕刻から開催。初会合につき会員各位万障繰合せ出席されたし。

あとがき

また一つ齢を重ねる●好むと好まざるとにかかわらず、不公平なく誰もが万人一律に神様から賜わる齢であり誠に有難く結構なこと、今年も頑張らなければ、と思いを新たにする●本紙〝予告欄の充実〟についてたびたび読者から御叱責を受ける●お叱りを受けるまでもなく筆者としてもこの点は常々苦労しているが、目下のところ一般から事前にお知らせを頂くより外に方法がないので焦慮している●たとえば演奏会の場合、プログラム又はその要点を前以ってお知らせ下さるとか、ラヂオ、テレビに出演されたときは生放速を除き、録音された時点で放送放映の日時を放送局が云ってくれる筈だから、直ぐにそれを当方に連絡して頂けばそれだけ予告欄を豊富にすることが出来る●全愛読者のためにどうかこの上とも御協力を頂きたい●年賀交礼の御協賛を沢山頂戴し感激している、一応お申込みの順に掲載したが万一不備の点があらば御容赦願いたい●十二月号は印刷機械の故障で完成が予定より四日おくれたため各地への発送がおそくなり申訳ない●郵便物の遅配などで締切後に到着した分は二月号で「寒中見舞」として掲載させて頂くから不悪御了承下さい●ここ当分は寒冷と戦わねばならぬ、お風邪など召されぬようどうぞ充分御自愛を。

昭和五十八年一月一日発行（非売品）
編集者　植村冥水
発行所　京絃社
〒565　吹田市山田東一丁目三一B六一四
電話〇六（八七五）〇三二六番

っているので問題も少ないが、いわゆる正派の方々の歌われる歌、特に古歌のなかには「意義不通」の箇所があったり、詩文としてはどうかと思うものを聴くこともある。案外私もそんなことをやっているかも知れない。

実は、萩原本にも気にかかるところがある。そのひとつは「月下の陣」、これは明治に入ってから作られた歌であるが、萩原本では「駒も蹄をくつろげず」となっているが、他本では「くつろげつ」となっているのがある。「ず」であれば駒もまだ警戒をゆるめず、いわんや人は更に緊張しているということになる。「つ」であれば警戒心の強い動物である馬まですっかり休んでいる、況んや人においておや、という情景になるが、私はその後の方が正解のように思っている。

今ひとつの日新公の作と伝えられる「武蔵野」の中で「騒ぐ草葉の露の身なれど」となっているが、後述の福本日南監修の歌本では「露の身なれば」となっている。これも一字の相異で意義が逆転する。私は前後の「つながり」から見て「ば」の方がベターのように思っているが、印刷された琵琶歌本としては最も古いと思われる「ますらをの友」第一巻が「ど」になっているためか、「ど」と歌われる方の方が多いようである。

「歌詞を誤り謬うことは作者に対して不忠実なのは勿論、弾奏本来の意義を没却してしまふ。元来苦心努力して作り上げられた歌の一字一句には、作者が表現せんとした何物かが刻み附けられてある。（中略）この片言双句が集って一つのまとまった歌文となり、歌全体の大きな精神となっているのだから、若し之を変更改ざんせんとする者がありとしたら、それは少なくとも原作者以上の実力を持った作者でなければならぬ。如かく重要な文句を誤り謡うに至っては、假令弾法、節廻し等に巧みであっても、到底弾奏家の資格者と云うことは出来ない、況んや文法を無視して動詞、助動詞を間違え、全然反対の意味に歌ってしまうものに於ておやである。」

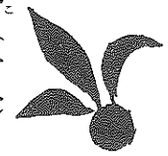
これは大正十年九月に、故辻先生主宰の無紘社より発行された福本日南監修・池田天舟選定の薩摩琵琶練習用歌本第一集の冒頭に「歌を選ぶに当り」として、池田天舟師が書かれたものであるが、琵琶の盛んな当時、おかしな歌を歌う先生方も多かったので、これを矯正するために池田先生が辻先生とともに立ち上がられたようである。

残念なことには、この本に収載されているのは「春日野」「月下の陣」「春の調」「七卿落」「武蔵野」の五曲のみ、又監修者の福本先生が亡くなられたので、第二集以下は発行されなかった？　ことである。

池田先生は更に「（このような弊害がでていることは）弾奏者の不注意からくること勿論であるが、最も主たる原因は暗誦する薩摩琵琶従来の習慣上、初め稽古する時に教授する者の誤りをそのまま暗んじて了った点にある」と断じておられるが、当時の子弟関係から「先生おかしいようです」と、弟子の方から申し出ることはできなかったのであろう。

しかしよく考えて見れば、琵琶の弾法や曲節は芸術芸能の分野に属するから、先生の教えを忠実に守り習わねばならないが、歌詞は文芸詩歌の領域なので、普偏的合理性がないものは拒否？　してもよかったのではないか。この「けじめ」をつけないで、ただ師のいうことに盲従？　してきたことに問題があったように思う。

萩原本は立派な本である。これを基礎として他の歌本を調べたり、文学に造詣深い方々の意見を求めて、「意義不通」の箇所のない、文学的価値の高い「琵琶歌文学」を確立したいものである。



おんなの都（みやこ）（一二）

落合一誠

祇王・祇女・仏（一）

京都嵯峨野の片すみに祇王寺というささやかな庵室がある。高名な寺院の多い京都の中で、こんな寺ともいえぬ微々たる庵室は、それこそどこにあるのかというような存在であるが、これが思いがけないほど多くの観光客を集めている。

狭い庵室に五つの像が由緒ありげに祭られていて、よく見ると一つだけ男性が交っている。これが平清盛像であって、残る四人が祇王、祇女、その母、仏御前である。

では、なぜこんな所に、天下に名高い太政大臣平清盛が顔を出しているのかというと、それは彼の悪業のむくい、云わばおのが恥を後世に至るまでさらしていることになる。ところで、こんなふうに清盛をとらえて放さぬ四人の女性たちとは、そも何びとであるのかというそのいわれに女の哀れが秘められる。

祇王・祇女の姉妹は白拍子であった。白拍子は水干（すいかん）に烏帽子（えぼし）、そして緋袴（ひばかま）に太刀を帯びた絵姿をもって知られている。

その姿ばかりを眺めると、現代人は恐らく官女か巫女（みこ）ぐらいに思うかも知れない。けれど、白拍子というのは歌舞をもって宴席に興を添える遊び女（め）であった。つまり現在の芸妓である。

だが、もとは遊女であるゆえ、歌舞を演じた上で客の求めるがままに売春を行った。つまり、祇王、祇女、仏といかめしい名前がついているが、本来は遊女、売春婦であった。祇王、祇女、仏というのは無論芸名である。

白拍子とは声明道（しようみようどう）の術語で、雅楽に於ける只拍子、つまり、アクセントのない平板な拍子、洋楽でいえば三分の三拍子に当たるものだという。

この白拍子が舞に組入れられ、始めは男性が演じたものだが、いつしかそれが男装をした麗人の舞いとなった。というのも、源平時代、特に平安朝末期は文化が爛熟して、今将に王朝文化が滅び去らんとしている末世のことなので、自然遊女たちも男装して枕席にはべった。

当時我国最大の遊里は江口。神崎の里で、そこは京都と西国とを結ぶ重要な交通路に当っていて、瀬戸内海を旅して来た舟が尼崎から神崎川へ入って、淀川との合流点にやってくる。そして乗継ぎを行ったり貨物を積み替えたりする。それが神崎、江口であった。従って江口や神崎の里には沢山の遊女がいて、天皇のお召しに預ったり貴族の相手を勤めたりした。また当時の流行歌は今様（いまよう）であって、江口の遊女は今様の上手として知られていた。白拍子は歌い且つ舞った。しかも衣装が流行の男装で皷を打ちつつ歌い舞うから、誠にきらびやかであった。

このように、目も耳も楽しませ、しかも美女を揃えて客の招きに応じて出張する。こうして出来た白拍子は忽ち満都の人気を集めて、江口の遊女を圧倒した。

源平盛衰記によると、鳥羽院の頃島の千歳、若の前とて二人の遊女舞い始めけり、とある。だから祇王、祇女が白拍子となって人気を得たのは、白拍子時代の初期のことである。

時の権力者平清盛は、源義朝の寵女（おもいめ）常盤御前を愛したかと思うと、厳島神社の巫女厳島内侍の許へ通ったり、女性関係も派手で、そのうち祇王の盛名を知って、一夜祇王を召し出した。この時祇王は十八歳、妹祇女は十六歳であった。

二人は清盛の酒宴に興を添えるため、水干の袖をひるがえして歌い舞った。

〃蓬莱には千歳（ちとせ）経る万歳千秋重なれり、松の枝には鶴巣くい、巌の上には亀遊ぶ。〃

姉妹合唱しての歌舞の華麗さに清盛は満足し、祇王をおのが寵妃にしようとした。

乃木将軍と忠魂碑の受難物語

辻旭城

新春を寿ぎ謹んでご祝詞を申し上げます。京紘社長植村寞水師をはじめ、全国琵琶愛好の諸先生方にはお元気で正月を迎へられたことと存じ、お喜び申し上げます。

旧年中は格別の御厚情を賜わりまして、有難く厚く御礼申し上げます。本年も頑張りますので、相変らず御交誼のほど偏えに、お願い申し上げます。

皇師百万征強虜　野戦攻城屍作山
愧我何顔看父老　凱歌今日幾人還

明治三十七年十月、第三軍司令官乃木希典

将軍は、旅順攻略を前にして決死の白襷隊を編成し、金州、南山の総攻撃を開始した。この砦は露軍が難攻不落を誇るだけあって容易に陥落することができず、塹壕から打ち出す機関銃は雨霰と飛びきて、攻める我軍に対し露軍の射程内に入って、背後に設けられた野戦病院へ続々と傷病兵が運び込まれ、狭くて暗い病室の中は凄絶な修羅場と化した。

この戦闘で、乃木大将の長男勝典中尉は戦死した。こうした苦戦苦闘を重ねること一ヶ月、多数の将兵と莫大な弾薬を犠牲にして、難攻不落の南山に何か月ぶりに日章旗が陽光を浴びた。続いて二〇三高地の激戦がはじまり、次男の保典少尉も敵弾に斃れた。この戦も天佑によって我軍の勝利となって遂に旅順を陥し入れ、明治三十九年敵の全軍司令官ステッセルの降伏によって戦争は終結した。

その年の五月、凱旋した乃木希典は、まづ宮中に参内して戦局を詳細に上奏した後、陸軍首脳部で一切の事務引継ぎを完了、そして閑居することになったので六月の末、信濃の国諏訪大社へ戦勝の報告と、併せて数多くの戦没者慰霊をして諏訪湖畔の温泉で保養することにした。

諏訪大社は全国各地にある諏訪神社の総本宮で上社と下社に分かれ、上社は本宮と前宮に、下社は春宮と秋宮になっていて、末社の数は一万数千社にのぼっている。両社とも信濃の誇る名神で、武神として昔から武人に尊ばれ、神功皇后・坂上田村麿などもこの社の神徳をたたえたといわれている。

乃木希典は社前にぬかずき、皇室の御安泰、戦勝の報告、戦傷病死者の冥福を祈願して応分の寄付をなし、大社前から人力車で諏訪湖畔の温泉旅館へ行くことにした。

その車上で、車夫の息子が今度の戦で戦死したことを知り、それが一人息子であったこと、孝行者で自分は六十歳の坂を越えたことなど、悲惨な話を聞いて涙ぐみ、宿に着くと自分の名刺を与えて帰らせた。

諏訪湖は海抜七五九米、その周囲一八キロ、面積一四・五平方キロ、最水深七米の淡水湖で、海に恵まれない信州には一見海を思わせるような山の湖である。その湖畔にかけて無数の温泉宿があり、湯量も豊富で諏訪大社への参詣客で賑わっていた。

その宿で乃木は、湖でとれた鰻やワカサギで晩酌を楽しんでいると、紋服に威儀を正した村の大勢が、玄関で口々に「お礼が云いたい、是非乃木さんに逢わせてくれ」と叫ぶ。

やがて大広間では村の者たちの肝いりで大宴会が催され、その食膳には味のいい湖産の料理が供されて、乃木をはじめ一同はただ感激にむせぶのみであった。

宴半ばにして村長は乃木に向い「今日の記念に亡くなった将兵の忠魂碑を建てたいので、碑文を揮毫して頂きたい」と申し出た。心よく承諾した乃木は、東京に帰った後染筆を送る旨答え、酒宴は盛会裡に終幕した。

それから数ヶ月、乃木将軍から〝忠魂碑〟と書かれた墨痕鮮やかな染筆が送り届けられた。在郷軍人会、村当局住民たちは大いに喜こんで、早速石工の手によって碑文は深く刻みこまれ、明治四十一年完成し除幕式が盛大に行なわれた。建設地の学校々庭には、近くの山から運び込まれた老松をはじめ、数々の樹木が広い校庭にあたかも忠魂碑の威厳を象徴するかのように見えた。

昔を偲ぶと―明治二十二年二月十一日紀元節に〝大日本帝国〟が発布され、昭和の敗戦とともに消滅したこの国号は、紛れもなく日本民族の国家の称号であった。ふり返ってみると、昭和十六年から二十年の五年間にわたり、南方戦線の激戦を中心に、本土にあっては食糧、空襲、経済などで過酷な運命をたどった。国民は戦勝の夢を描きながら東條英機に総てを託したのであったが、あの戦争は何であったのか、改めて世に問うまでもない。

敗戦後進駐軍から、突如この村の忠魂碑を接収するという命令が発せられ、それから間もなく老松をはじめ数々の樹木は伐られ、乃木執筆の忠魂碑も倒されてしまった。

国護るつわものどもの忠魂も
やぶれ果てては消えてなくなる

あえて云うならば、この記事は単なる〝反戦特語〟でもなく、また〝戦争讃美の物語〟でもない。筆者は、世の人々に平和を訴えるものである。日清・日露両戦争や太平洋作戦後顧みられなかった人物、隠された物語が明らかにされることを期待する次第である。

後醍醐天皇と建武の中興（二）

ばくすい

天皇の側近に俊基を残し、武士の中に足助を残して置いた事は、今後の計画を進める上に非常に有益であった。これまでは資朝を中心として進められた計画を、俊基が代って促進する。叡山へは大塔宮護良親王と妙法院宮宗良親王を入れ、相ついて天台座主として一山を統卒して頂き、後醍醐天皇も行幸される。奈良では春日社、東大寺、興福寺を訪ねてこれを味方につけられる。是等の勢力と諸国勤王の将士を集めて幕府を討つ計画が段々進んで来た時に、幕府はこれを探知した。元弘元年（一三三一）五月、幕府は俊基を捕えて鎌倉に護送させる。この有様を記した太平記の文章は昔から有名である。それは「七月十一日に又六波羅へ召捕えて関東へ送られ給ふ、再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるるか、鎌倉にて斬らるるか、二つの間をば離れじと思ひ儲けてぞ出でられける」と続き、七五調の詩になっている。続いて―

落花の雪に踏み迷ふ　片野の春の桜狩
紅葉の錦を着て帰る　嵐の山の秋の暮
一夜を明かすほどだにも　旅寝となれば物うきに
恩愛の契り浅からぬ　我が故郷の妻子をば
行衛も知らず思ひ置き　年久しくも住み馴れし
九重の帝都をば　今を限りとかへりみて
思はぬ旅に出で給ふ　心の中ぞあはれなる

（中　略）

時雨もいたく森山の　木下露に袖ぬれて
風に露散る篠原や　篠分くる道を過ぎ行けば
鏡の山はありとても　涙に曇りて見えわかず
物を思へば夜の間にも　老蘇の森の下草に
駒をとどめてかへりみる　故郷を雲や隔つらん
番場、醒井、柏原　不破の関所は荒れ果てて
猶漏るものは秋の雨の　いつか我身の尾張なる
熱田の八剱伏し拝み　潮干に今や鳴海潟
傾く月に道見えて　明けぬ暮れぬと行く道の
末はいづくと遠江　浜名の橋の夕潮に
引く人もなき捨小舟　沈みはてぬる身にしあれば
誰か哀れと夕暮の　晩鐘鳴れば今はとて

（後　略）

池田の宿に着き給ふ

京、鎌倉の間を往復した人は数多くある中に、太平記が特に俊基の東下りに多くの言葉をつかい、美しい詩にまで作りあげてその道筋をくわしく述べているのは、殺されるにきまった俊基朝臣の死出の旅に対する深い同情があったからであろう。俊基が京を出たのは七月十一日、鎌倉に着いたのが同月二十六日、そしてやがて斬られた。

討幕の計画、前にはその中心人物は資朝であった。資朝正中元年に佐渡へ流された後、代って中心となったのが俊基、その俊基が鎌倉の手に落ちたあとの責任者は、権中納言源具行（北畠）で四十二歳、兵を集めて六波羅を攻めんとしている間に、元弘元年八月二十四日夜、幕府勢が逆に宮中へ攻め来たるの密告があった。具行方の準備は未だ出来ていなかったので、急遽天皇を奈良へ遷すこととし、大納言師賢を、行幸のように見せかけて叡山へ登らせて賊兵を欺すと同時に、叡山を味方にせんとした。そして天皇は奈良から和束の鷲峯山、そして笠置寺へお遷しした。笠置山は天険の地勢、自然の城郭、頗る防戦に適している。

六波羅ではこれを知って四方から笠置寺を攻めたが、官軍はよく戦って之を防ぎ、特に三河の国の足助重範の強弓は敵を恐れしめた。鎌倉では北條高時これを聞き、更に関東の大軍を派遣したが、その大軍の応援を待たずに、賊軍は笠置寺に火をかけ一山煙に包まれて、遂に官軍の敗戦となった。

後醍醐帝は、藤房・季房兄弟を供に笠置の山を脱出、忍び忍び河内赤坂へ赴かれるつもりであったが、賊軍の捜索が厳しくて夜しか歩けない。太平記に

梢を払う松の風を、雨の降るかと思し召して、木陰に立寄らせ給ひたれば、下露のはらはらと御袖にかかりけるを、主上御覧ぜられて

さしてゆく　笠置の山を出でしより
あめが下には、かくれがも無し

藤房卿、涙をおさへて

いかにせん　たのむ陰とて立ちよれば
なほ袖ぬらす　松の下露

賊兵は遂にこれを発見し京都へ護送して、翌年春三月、遠く隠岐へ帝を流罪にした。

謹賀新年

薩摩琵琶
天嶺　島津　正
〒830
久留米市国分町一五三四
電話〇九四二(二一)八八五八番

筑前琵琶
ゾーゲバチ製作
巻田旭玄
〒533
大阪市東淀川区下新庄一丁目七ノ五
電話　〇六(三二二)六四二七番

錦心流
一水会城東支部相談役前支部長
妙想院　松本藷水
〒120
東京都足立区青井二ノ十四ノ二六
電話　〇三(八四〇)三八九二番

正派薩摩琵琶
正調詩吟指南
穂洲　最上十太郎
〒031
八戸市内丸三ー五ー三
電話〇一七八(二二)八七七五番

錦心流琵琶
一水会大阪支部
会員一同
〒580
松原市柴垣一ノ一九ノ二七
中山鳳水方
電話〇七二三(三二)一一九〇番

錦心流琵琶
一水会京都支部
会員一同
〒606
京都市左京区下鴨蓼倉町一六
馬場鴨水方
電話〇七五(七八一)三〇五〇番

京都琵琶協会
〒603
京都市北区平野宮西町六四
平井方
電話〇七五(四六一)一四二三番
会長　平井春嶺

賛助会員
〃　馬場鴨水
〃　林田城蔚水
〃　林田城旭水
西川磯旭水
岡本村旭水
楊嶽水
田中歉水
植村寞水
梅原旭濤水
矢吹旭津美
安住旭康
山岡旭清
牧南水
荒木旭媛水
木下皇水
岸本港水
桜井旭富水
水内媞水
福島弥生
山田明
高橋正雄
楊光子

謹賀新年

薩摩琵琶
正絃会・四明会会員
岡部錦蝶
〒359
所沢市中新井二ノ二八一ノ四
電話〇四二九(四三)〇九二八番

錦心流琵琶一水会
秋田支部長
星野雄水
〒011
秋田市土崎港中央四丁目九ノ一六
電話〇一八八(四六)三三三四番

吉井良三
〒567
茨木市新郡山二丁目一ノ二〇七
電話〇七二六(四一)二八一六番

錦心流一水会大阪支部
中山鳳水会
養老駿水
〒542
大阪市南区道頓堀一丁目東六ー二二
電話　〇六(二二一)七五〇八番

翠琵琶宗家
竹下翠風
〒194－01
東京都町田市金井町二六一二ノ三八
電話〇四二七(三四)一一八八番

錦心流琵琶
阿部秋子
〒454
名古屋市中川区中島新町
中川住宅五ノ四〇一号
電話〇五二(三五三)〇二八四番

錦心流琵琶
哲泉流詩吟教室　蓮水会
〒662
事務所　西宮市羽衣町七ノ二九
三浦蓮水方
電話　〇七九八(三三)五八八七番

顧問　佐藤光司郎
会長　三浦蓮水
副会長　楊嶽水
理事　反町紫水
〃　女流　田川蘭水
〃　生島華水
〃　川上琵水
〃　吉田秋水
〃　瓜生瞳水
〃　村上湧水
女流　木の宮梅水
〃　田中珠水
〃　高原柳水
〃　滝沢花水
〃　楊光子
〃　村上紀代美
〃　渋谷啓子
〃　藤田進
加藤敬徳

詩吟部一同

謹賀新年

錦心流琵琶一水会
琵琶を楽しむ会
田中歉水
〒658 神戸市東灘区御影中町一ノ一四
電話〇七八(八五一)一二六三番

筑前琵琶旭会
林旭萠
〒603 京都市北区上御霊上江町二三二ノ二
電話〇七五(四四一)〇六〇九番

錦心流琵琶
馬場鴨水
〒606 京都市左京区下鴨蓼倉町一六
電話〇七五(七八一)三〇五〇番

筑前琵琶橘会
法香久院
荒木旭媛
〒606 京都市左京区岡崎徳成町二五
電話〇七五(七七一)四〇一六番

錦びわ錦秀会
錦秀木原綾子
外会員一同
〒164 杉並区高円寺南三ー四二ー十六
電話〇三(三一五)三一八〇三
〒204 船橋市高根台四ー十五ー四
電話〇四七四(六六)七九四〇番

筑前琵琶日本旭会
吟詠扶桑流桂水
大師範 若宮旭登
旭登会員一同
〒189 東京都東村山市美住町一ノ四
久米川公団九ノ二〇四
電話〇四二三(九一)九三二一番

洲楓会本部
家元 大館美江子
〒156 世田谷区八幡山二ー一ー一〇
電話〇三(三二九)三五五〇番
理事長 桑名洲聖
〒108 港区白金一ー十二ー二
電話〇三(四四一)三六一七番
副理事長 荒川洲帆
〒150 渋谷区渋谷一ノ六ノ四
電話〇三(四〇七)〇〇七〇番
常任理事一同

謹賀新年

牧秋静（南水）
〒604 京都市中京区西ノ京西鹿垣町一一
電話〇七五(八四一)二九八九番

菱風会長
武田恒水
〒402 静岡市丸山町八七

薩摩琵琶
仲川秀邦（旭朋）
〒164 東京都中野区本町三ノ二ノ二
新都ハイツ二〇五
電話〇三(三七五)一八四七番

日本琵琶楽協会参与
愛媛琵琶協会顧問
佐藤晃絃
〒790 松山市立花三丁目五ノ六
電話〇八九九(四一)三八八七番

大阪・吟水会
会主 小川吟水
〒570 守口市緑町十七土居団地十一号
電話〇六(九九二)五六二五番
桜田吟芳
増田剛水
北村玄水
梶崩水
金寄靖水
小西甫水

琵琶三美会
会長 矢吹旭津美
田中鵬水
桜井旭富
西村旭富
一坊寺旭清
篠原旭洋
外門人一同
京都市南区吉祥院中島町三〇ノ八九
電話〇七五(六九一)〇一二八番

薩摩琵琶士弦会
事務所 東京都葛飾区堀切二ノ六〇ノ三
〒124 清和荘十五号
電話〇三(六九四)九五七九番
代表 鈴木元実
柳沢冠城
田口敏義
佐藤湘春
中村錦道
寺内信夫
黒沢玄城
町田有好
橋本美恵子
田辺文夫
船越俊子
竹渕聖子
後藤幸浩
馬場幸昌
指導 普門義則

謹賀新年

琵琶諸芸慰問無料奉仕
大阪琵琶同好会
石橋旭嶺
外会員一同
〒547
申込先　大阪市平野区平野本町二ノ四ノ八
電話大阪〇六（七九二）一四八四番

高橋蘇水
〒042
函館市湯川町三ー七ー一五
電話（五九）二四五三番

錦・都派琵琶
家元　都錦穂
会員一同
〒113
東京都文京区根津二ノ十五ノ二
電話（八二一）五七〇八番

日本琵琶楽協会
関西支部顧問
京都琵琶協会顧問
錦心流琵琶
植村寞水

錦心流琵琶輝派
輝水会本部
輝錦凌
外会員一同
〒113
東京都文京区本郷五ー二ー三号
電話（八二）七五七四番

筑前琵琶日本旭会
田中旭昇
〒653
神戸市長田区梅ヶ香町一ノ一五
電話〇七八（六七一）〇〇一四ノ一八番

筑前琵琶日本旭会
浜本旭好
〒678
相生市相生二丁目一四ノ一七
電話〇七九一（二）五一一八番

日本旭会
範司
押田旭窈

筑前琵琶
紅会
東京都新宿区三栄町十六
電話〇三（三五一）四五九一番
〇三（三五三）三八三〇番
〒160

謹賀新年

薩摩琵琶四明会会長
京都琵琶協会々長
日本琵琶楽協会常任理事
同　関西支部副支部長
平井春嶺
〒603
京都市北区平野宮西町六四
電話〇七五（四六二）一四二三番

筑前琵琶旭会
京都琵琶協会副会長
大師範　梅原旭濤
〒617
京都府向日市西向日鶏冠井町山端二
電話〇七五（九二二）四五一二番

筑前琵琶総師範
法汪山　藤巻旭鴻
〒171
東京都豊島区高松三ノ一二
電話〇三（九五五）三六四五番

琵琶一水会神戸副支部長
琵琶蓮水会副会長
楊嶽水
光子
〒662
西宮市松園町十三番二十一号
電話〇七九八（二二）八二〇八番

吟詠
琵琶　赤心流
家元
赤心流鶴翁
〒420
静岡市西草深町二十一番二十号
電話〇五四二（五三）一四七一番

謹賀新年

筑前琵琶日本旭会
大師範　冨樫旭桂
〒673　明石市松が丘四丁目二ー一四ー
電話〇七八（九一四）八六三三番

桜井旭会会長
秋元旭晨
〒618　大阪府三島郡島本町桜井四ノ一八ノ一〇
電話〇七五（九六一）五〇四三番

筑前琵琶嶺派
嶺旭蝶
青山旭子
〒810　福岡市中央区春吉二ノ八ノ二
電話〇九二（七六一）〇三二〇番

大阪旭香会々長
菅旭香
会員一同
〒531　大阪市大淀区長柄西二丁目十二ノ五
電話〇六（三五一）四〇八一番

筑前琵琶日本旭会
桝本旭風
〒537　大阪市東成区神路三ノ八ノ十八
電話〇六（九八一）二二九一番

高千穂旭楓
〒544　大阪市生野区小路二ノ二六ー二五
電話〇六（七五三）〇三二五番

謹賀新年

筑前琵琶橘会宗範
山堺旭萃
大和流琵吟家元
山崎光掾
〒569　高槻市宮田町一ノ六ノ五
電話〇七二六（九三）三一五九番

筑前琵琶旭堂会
旭会総師範
柴田旭堂
上原まり（旭艶）
〒651　神戸市中央区上筒井五ノ四ノ二
電話〇七八（二二一）一一六一番

錦琵琶本部
宗家　水藤五朗
桜子
〒176　東京都練馬区旭町三ー二二ー四
電話〇三（九三〇）四四九八番

日吉丸

佐藤忠男

尾張の百姓の子で、顔が猿に似ているため小ザルと呼ばれていた少年が、十五歳で家出して織田信長の家来になり、後に天下を統一して太閤豊臣秀吉となった。秀吉の幼名は日吉丸といったというが、これは後に秀吉が日吉山王神社の申し子だと伝説化された俗名である。信長が焼き払った日吉神社を秀吉が復興したので、神社の関係者が秀吉の神格化のため力をかしたらしい。然し秀吉は大衆に愛された英雄であった。百姓出身で天下を取ったのだから、人間は努力次第で何にでもなれるとの手本になった。信長の草履取りをしていて草履を自分の肌で暖めて信長に認められたという逸話は、教訓として語り伝えられた。

日吉丸は放浪時代に野武士蜂須賀小六と知り合い、後に信長の家来となってから、この野武士の勢力を活用して頭角を現わした。源義経とその家来たちの物語もそうであるが、英雄物語は時々英雄が無名で不遇の時代に辛い放浪の旅をする物語を含んでいる。その旅の途中で次ぎ次ぎと凄い能力者と知り合って彼等を心服させる、そして後に彼らを率いて立ち上がる。英雄とは社会の底辺を自分の足で歩き、そこに埋もれている新しい勢力を発見し、その勢力に目的を与える人間であると云えよう。

秀吉の生涯は、百姓の子でも天下が取れるという出世の夢を後世に残した。丸太小屋から大統領へと出世の夢をアメリカ人に残したリンカーンのように、今太閤と呼ばれる人物が後世しばしば現われるゆえんである。只リンカーンは出世の夢と同時に奴隷解放という理想主義を一身にあらわした道徳的理想像であったが、秀吉は天下を取るや金銭を湯水のように使い、ぜいたくをして人々に見せびらかし、更に朝鮮へ侵略の手を延ばした。

隣国の韓国に於いて、史上もっとも憎まれている人間の一人が豊臣秀吉であることを、われわれは忘れてはならぬ。

「裟羅雙樹」

ナツツバキは山中にはえる落葉高木で、高さ一五メートルほどになります。

和名の夏椿は、夏に咲くツバキと云う意味ですが、普通のツバキと属を異にします。

別名の沙羅の木とは、東インド地方のフタバガキ科の常緑喬木、沙羅の木のことで、どこでどう間違えられたのか、日本のナツツバキの別名となっています。

伝説には、お釈迦様がクシナガラ城北で入滅されたとき、東西南北に二本ずつ沙羅の木があった（沙羅双樹）と伝えられており、ナツツバキをインドの霊木、沙羅の木として寺院の境内などにはよく植えられています。また混同しやすいものに、同属で六、八月ごろに直径二センチ前後の白花を咲かせる「ヒメシャラ、ヒコサンヒメシャラ（共に神奈川県以西、四国、九州に分布している）」がありますが、ナツツバキにシャラノキの名を当てたものですから、こちらは葉も花も小型であるため、ヒメシャラとなったわけです。

参考

沙羅の花は白色で、直径五ー六センチあります。琵琶歌の本には裟羅雙樹と書いてあるようです。（佐藤晃紘氏寄稿）

吉井良三

乾きたる心に泌みるごと語る
師の琵琶吾れの空しさ満たす
言い知れぬ深きとまどい果てもなき
世の桎梏を琵琶はほぐすか

短曲　嵯峨の秋

故弘沢雨水作詞

世の柵をときかねて　なさけを仇の数々を」
詫び参らせん心根も　瑜伽三密のたしなみに
雲の通路ふきとじて―君は浮世のそとの人」
行ないすます滝口の　結跏乱さん由なくて
闇に紛れて佇めば　木の間を洩れし鈴の音に
覗き見られし笠の内　隠さんすべもなかりける」

山深み　思い入りぬる柴の戸の
まことの道に　われを導け」
往きの健気に引きかえて　袖もしおるゝ戻り道」
月の影さえ傾きて　わが身一つの秋ならぬ」
野路に清掻く虫の声　鳴く音か細き横笛の
里にこぼせし残り香をしず心なき小夜嵐
渡すにまかす嵯峨の秋」

鶴派琵琶家元東京鶴田錦史氏は多年琵琶楽を通じて国民の思想善導に貢献されたかどにより昨秋勲四等瑞宝章受章の光栄に浴された。紙上を通じて奉祝する。

三越名人会に琵琶演奏

十月三十日(土)昼(文化庁芸術祭参加―有料)神田山陽の講談、清元志佐太夫の清元、竹本土佐広の義太夫、淡谷のり子の歌謡曲、三遊亭金馬の落語、斉藤京子、花柳徳兵衛舞踊団の民謡の各名人に伍して木原綾子女史が琵琶白虎隊を演奏し好評を博した。

壺坂寺盲人ホールで琵琶慰問

十一月十日(水)昼、大阪琵琶同好会協賛。赤垣源蔵―米原星智▼城山―寛嶺山▼本能寺―矢野旭信▼大楠公―朽木旭明▼花の白虎隊―松本旭勇▼菊水の旗―辻旭城▼川中島―田中歓水▼常陸丸―作花旭友▼衣川―奥村旭美▼関ヶ原―石橋旭嶺▼岩壁の母―西村旭瑞▼壺坂寺―天津八千代。外に詩吟、剣舞等数番。

七宝滝寺秋季祈願祭に琵琶献奏

十一月十四日(日)昼、大阪琵琶同好会協賛。晴天に恵まれ五百人の修験者が各地から参集盛況裡に終始した。同寺は和泉国葛城山の仙境にある真言宗犬鳴派の大本山で役の行者の修験根本道場である。城山―朽木▼石童丸―米原▼川中島―島津▼赤垣源蔵―西川旭山▼白虎隊―柴田旭井▼松の廊下―野々村旭川▼花の白虎隊―作花旭友▼安宅の関―辻旭城▼関ヶ原―石橋旭嶺。

山田洲鳳琵吟道六十周年記念大会

十一月二十一日(日)昼東京新宿区文化会館、協賛新宿区厚生部老人福祉課。菅公―内田・紘中村洲心▼紅葉狩―佐藤洲栄▼本能寺―桑名洲聖・紘荒川洲帆▼異国の丘―会主山田洲鳳の外会員並びに来賓による吟詠、舞、新舞踊、剣舞、書道吟等六十二題。

日本琵琶悠紘会十一月例会

十一月二十三日(木)昼東京中野区大和町地域センター。門琵琶合奏―錦幽、一峰▼利休の最期―山崎錦幽▼新撰組―田島綾女▼大石主税―伴旭友▼橘大隊長―中村洲心▼敦盛(上)―八束一峰▼西郷隆盛―青木早水▼石童丸―清水璞水▼常盤御前―中村修水▼敦盛(二)―畑嘉水▼桶狭間―大富士岳鮮▼鉢の木―長谷川繡水。五時半閉会。

錦心流琵琶秋季演奏大会

十一月二十八日(日)昼大阪府私学教育文化会館、主催一水会大阪支部、後援一水会本部、神戸、京都両支部。屋島の誉―田実繚水▼西郷隆盛―中野岑水▼戸隠山―住田紘水▼別れの盃―梶雨水▼本能寺―金寄靖水▼敦盛―中山嬢水▼村上喜剣―稲葉卓水▼巌流島―養老